

1968. 1.13 中大連合自治会、授業料値上げ反対を要求して全学スト。
2.16 理事会、値上げ反対。
- 1.39 東大医学生自治会、医師法改正に反対。無期限スト。
2.17 学生 17 人の処分発表。
- 2.12 教視庁、大学の要請なしでも構内立ち入り検査ができる「学内出動基準」を通過。
- 2.13 ☆医学部自治会・看護連常大支部が全学部委員会結成。無期限スト。
6.13 スト解除。
- 4.15 国税庁、日大の經理で 20 億円の使途不明と発表。
5.27 全学共同会議結成。6.11 学生 3000 人、大衆団交を要求し決起集会。
6.15 東大で当局に反対の書面達 70 人、安田講堂などを占拠。
6.17 大河内惣長、機動隊導入を要請し講堂占拠者を排除。6.30 9 学部でスト。6.28 全学共同会議結成。7.2 安田講堂再占拠。
東京教育大で文学部学生就活移転に反対、スト。
6.30 大学本部を占拠。
- 9.4 日大当局、機動隊の追撃で本部などの占拠学生排除の便処分を執行。132 人逮捕。
- 9.30 全学共同系学生約 1 万人。吉田会場と翌朝まで大衆団交。会頭以下出席理事、学生自治評議への自己批判、使途不明金の全容公開。大衆団交再開の範囲に署名。
10.1 佐藤首相、团交を批判。10.3 会頭、確約書を破棄。
10.21 國際反戦デー。反日共系学生ら国会・防衛庁に侵入、新宿駅を占拠、放火。警視庁、暴乱罪を適用、734 人逮捕。
- 11.1 東大評議会、大河内惣長・10 学部長の辞任を承認、学生処分取り消しを決定。
11.13 大学問題思潮会初会合（首相の私的報酬問題）。
この年 全国 115 大学で紛争発生。うち 65 校は未解決。
1969. 1.10 東大、7 学部集会を秩父宮ラグビー場で開催。学生 7000 人参加。日本青年館で 7 学部学生代表團と非公開團交。加藤總長代行確認書に署名。
1.14 ☆吉田寮・猪野寮寮生による寮闘争委員会、総長・学生部長と「団体交渉」、無条件増資・長期計画撤回・財政金額公開を要求。
1.16 締闘争委員会、「団体交渉」決議を宣言し、学生部を封鎖。
1.18 機動隊、大学の要請で東大安田講堂など占拠の学生を排除、631 人逮捕。
1.20 東大入試につき、加藤總長代行と坂田文相の協議不調。1969 年度入試中止に決定。
1.23 ☆封鎖解除派学生、学生部封鎖を実力で解除。
1.25 ☆全学園争議監査委員会、封鎖問題等について監査と「団体交渉」（1~27 日）。女学部 4 回生、無期限ストに入り。
1.31 教養部、無期限スト入り。2.3 文学部自治委員会、無期限ストを決議。2.13 工学部、無期限スト入り。2.24 農学部、無期限スト入り。
2.3 自民党、東大の紛争解決の「確認書」は、治外法権の容認で、違法と要明（法訓局・文部省も批判的見解を表明）。
2.14 ☆教養部議員会開催をめぐって、五倉連絡会議派学生と共同派学生とが衝突。二百数十名負傷。
2.18 日大、機動隊を導入し、文理学部を最後に全学の封鎖を解除。
2.26 ☆共同派学生、時計台を封鎖。
2.27 封鎖解除派学生によって解除、約 200 名負傷。
3.3 ☆学外 11 方所で入試実施。
3.17 ☆教養部開拓委員会、教養部「解放区」宣言を行い、主要な建物を「自主管理」。
3.25 ☆予定されていた卒業式中止。
4.11 ☆入學式に共同派学生が乱入、開式後 10 秒で閉式。
4.21 文部省、全国の大学長に、教育の学内立ち入りの最終判断は警察にあると警告。
4.30 中央教育審議会、「当面する大学教育の課題に対応するための方針」を答申、文相の指揮を強化する臨時特別立法の方針を示す。
5.9 国立大学協会、中教審の答申、立法化指向に反対声明。
5.11 ☆医学部全学園争議委員会、医学部構内を封鎖。
5.22 ☆共同派学生、本部構内を封鎖。
5.23 機動隊、封鎖解除。
5.29 共同派を支持する教育 200 名、「大學を告げる」全国教育研究集会を開催。

- 6.23 ☆共同派と五倉連絡派学生が本部構内で抗対。
6.29 教養部代議員大会をめぐり再衝突。
6.30 ☆共同派学生、今出川通りにバリケードを设置、機動隊と衝突。
7.9 大学臨時措置法反対で紛争中の早大で全学スト。
9.3 機動隊、大理講堂などの封鎖を解除。
7.24 国公私立 96 大学長、反対声明。
8.7 大学の運営に関する臨時措置法公布。
9.17 ☆共同派学生、時計台を封鎖占拠。
9.21 機動隊、各種物の封鎖解除。9.22 機動隊、時計台の封鎖解除。
9.19 警察署、上半期に政治活動による高校生の逮捕が 94 校 144 人を発覚。
10.1 教育部で授業再開（医学部で再開）。
12.18 ☆医学部で授業再開（医学部で再開）。

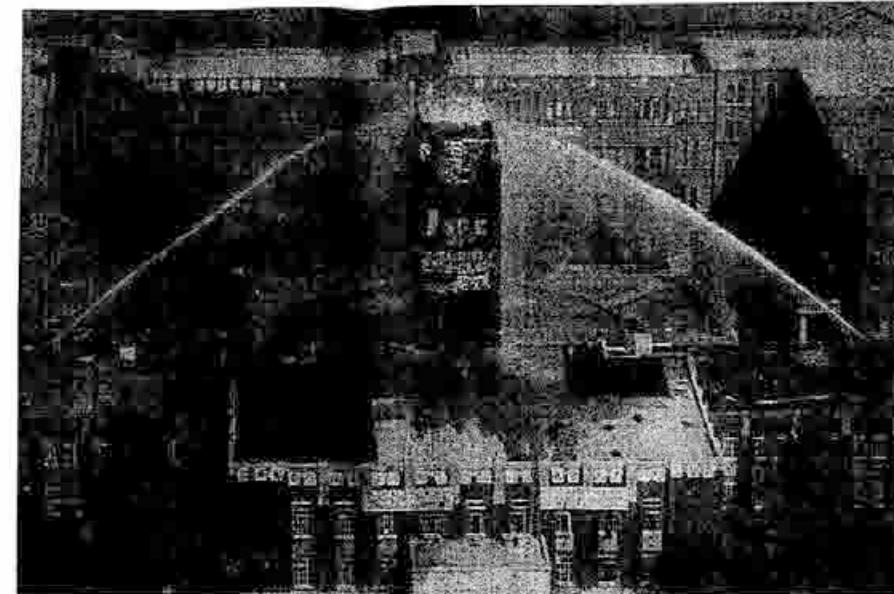


写真1



写真2



写真3

学生紛争に伴う負傷者数調
一九六九年四月四日～三月
（八三）

月	日	学生紛争に伴う負傷者数調	
		負傷者数	個
九〇九	六二	八九	一五
		（保健室附属施設 二九三人）	（保健室附属施設 一〇一一人）
		（安井病院 二三三人）	（安井病院 五六八人）
		（保健室附属施設 不四五人）	（保健室附属施設 四五四人）
		（吉田寮附属病院 四四四人）	（吉田寮附属病院 四七八人）
		（吉田寮附属病院 五六八人）	（吉田寮附属病院 四四四人）

史料

まない人々は、個性を作らないながら、企業体の運営を決定する過程に参加できない。そういう人は直感行動をとる権利がある。「これはね、やりたい」と思ふことは、労働者の場合もそぞろとうに個性を作るものは労働者であるというのにならぬ? は、差りと権利を論理的に追究していくことができるわけですが、私自身が今後も據んでいたことは、具体的な問題としての学生部会といふことだつて、今お話しした労働者の場合のように、「やっぱりと言ひきれる人間的論理」というものにまで行進曲で「さりやせん」。それでさういふ学生議論と頭をあわせるたびに、そういう権利があるのかないか、それをきかせてくれと言つてゐるのですが、今のところは、きりした結論が見えなくて困りでしません。

する党派というものは良くも悪くも「一つしかなかつたもの」で、その一つの党派の周辺にシンハイサイダーがあり、左翼田和見がおり、近付主導者がいるという四式なつたが、現在は多くの党派が分立し、互いに全体として競ひつて互いに競争をくりかえしてゐる。私は、内閣へも含めて、現在の政治的分裂構造は、より表面に近づいた結果だと考へておる。

革命は一党一派によつて成るのではなく、激進な思想政治的活動を嫌がなければなしとするものであるものでし
て、そういう状況の中から誰が一つの未来への光を放射すればいいのであって、右翼を続けるアーヴィングの如き、威脅説はかえって何を生むるかしない。互にいる場合にはタフニスをやりあってなくとも、そういう思想的競争こそが、社会的、精神的、体操的、宗教的、政治的な連合を防ぎます。その意味を知らなければならぬのならば、現実問題とその暴力力が實われますが、はつきり申し上げておる所が競争しているものは自明跡と結婚して「翁の名残だけ」あらう。しかし、いつもの競争問題と同じくあります

それが、左翼の延長としての「左派」と、それから軍艦とか駆逐艦とかいうこともあらず、私の意見などとて最大の争点は軍艦航行の是非といかだたる事とあります。私はまだ考へておらずませんが、今こそ左派の心を改めらるるによ
り、左派船頭が合意書ではなく、大人間の合理的性によ
て結婚されるべきであるから、口角わきを飛ばして議論すべ
く時だと想います。左派船頭は、一般的にいえば非暴力軍艦航行を主張する立場です。と学生時代からしておった。

直接行動というものは、命の中に申しますが、モモキバトからハシミト。極端な場合には焼き身自殺からテロ。そういうものが全く食む相手なので、封鎖も直接行動であります。

では何故直接行動が最も強大といふか。それは労働者の場合は非常に「生き残り」しています。労働者は四年に一回の投票権を与えられており、投票はしますが、そしてその政治的平等といふ権利的の影響を与えられておりますが、実際に生活においてはどうでしょ。さうか、自分達が弱くて個々を守り出している勢、つまり階級の中では投票権をもつておられない労働者があるのです。人間にとって

「実際に大事なのは四年に一度の投票権ではなく毎日毎日生活していく問題でした時間を通して効率の問題なのです。しかも労働者が自分が価値を作り出してしまつておかないから、」

労働組織と階級關係の別な効能者、企業家がおり、その企画の運営、経営、未來へ向けての方針というものを作つたらだけで決定してしまいます。

例へば私自身が關係していたある出版社が最近倒産しましたが、そろそろ書籍も監修も監修の問題がござります。つまり労働者たるが問題を抱えながら、まことに倒産です。

「まあほんとうのところ、それで労働者たるが、たゞやく倒産が出来ないでござるが、何をほんとうに倒産でござるかねれば競争に入つてゆけないというのはおかしいと思ふんで、人間は愛想なものに拘えじくわはならない。」

それでついで問題が複雑化して競争が進んでしまつて思ふが労働者と連絡すると言つても、労働者と一緒にござつた

「ほんとうのところ、どうも競争入つてゆけない」と思つたが、先生は高橋自身を振り越えることによって、いふことを学生や労働者と連絡できぬのです。

中略

する危機というのではなく、最も悪いのは、政治思想が最も進歩的で、その一つの表現の形態にシニシズマーがあり、左翼日本を見たとき、近頃主張者がいるという風式なが、現在は多くの党派が分立し、互いに全体として競いつつ互いに抗争をくりかえしています。私は、内閣へも含めて、現在の権力組織の分裂構造は、より簡単に近づいた結果だと考えております。

革命は一党一派によって成るのではなく、徹底的な思想政治的判断を経なければなしとげるのものでないものにして、そういう戦闘の中から誰かが一つの未来への光を放射すればいいのであって、問題を提起するアーヴィング主義の統一感覚論はかえって何も生む出さない。互いにいる場合にこそ、タリードをもつて、なぜなら、そういう形態が最も多くあります。私は、内閣へも含めて、現状の政治は、何よりも政治行動の体制であり、体制の運営から思想や政策をもたらすものではなく、政治的指導者としての立場をもつておられるべきであることを願っています。

そういうことをもつて、私の立場は、この最大の争点は、政治行動の実行力と、いかなることだらうと思います。私はまだ考案されておりませんが、今後は必ず公表するつもりで、政治行動が合意性ではなく、人間的または個性的によつて実現されるべきか否かを、口角あわせ飛ばして議論すべきだと思います。私個人は、一般的には非暴力直接行動を勧める立場です。と学生時代からしてきました。直接行動というものは、念のために申しますが、モーキットとか、ロバーツ、極端な場合では燃や公殺からで、そういうものが全部含む概念なので、封鎖も直接行動です。

では何故非常に直接行動が必要かといふと、それは、政治権力を与えられており、投票権はしませんが、そしてその政治的平等といふ理想的幻影をもたらされておりませんが、実際には生活においてはほとんどしていません。自分達が熱いて個個を生み出している場、つまり農業中では投票権をもつておらず、政治権をもつておらず、おもに市民、大間にとて実際に大事なのは四年に一度の投票ではなく、政治活動の半生を生きていて整理した時間と過半の過半の年です。しかも活動者は自分が価値を作り出しているにもかかわらず、何故生産と階級關係のない別な階級者、企業家がおり、その企画の運営、経営、末来へ向けての方針というものを自分たちだけで決定してしまいます。

例えば自身が關係していたある出版社が最近倒産しましたが、その倒産者たるものは到底も監視の異いがなしです。つまり政治者たるものは到底も監視の異いがなしで、つまり倒産する法則というのがある。ところそこで隠して暮らす人々は直前までその事を知らず、私も外側から聞きに加ねていいだけですが、つまれてしまつてから、おまえさんは原稿料

皆間や生活の領域が違っていても、本当に悩る、解決しないところとする人々はたゞ幾つかなくとも運営してやけるところなんですよ。例えばダラ・吉田松陰が命によって魅力的なのは、彼が革命家だからといったのではなく、「人間としてどうなればいい」人間としての吉田松陰が「お前はどうなんだと」という言葉をつくりけるからです。

逆に被審に対して僕は負債があるのですよ。バーナード・バークーは「なぜか無名の事件が普通に気にかかる」とおっしゃりますが、お間違ひなんんだ。」と、園谷さんの解説の大半が頭としてわかるのじ。決して、園谷さんが体制の中で苦労しているか、頭で理解していることを主張している。その意味において初めて「被審」というものがあると言えるのです。（おわり）

学生曰　君は回生ですが、今現実的に卒業や大学院入試が迫ってきて、どうしようか迷っています。昭和の問題として入試中止といふた事態も起らぬない時に、先生や同僚を組んでいる諸君は一体どうな御案を出しているのか、卒業へ入試をひきえた者のことを教えてほしく。

司会　それは個人的な解決すべき問題であります。それは自分自身が抱えている苦難である。個人的なことでありますからお聞きされるべきだとは存じません。

学生曰　個人的問題といわれながら多く抽象的に「大衆」とか「人間」とか書かれていて、現実的にはそれで全ての人間が含まれてこないことが問題ですか。むしろそれは抽象的論理の工具化でしかないと思う。

学生曰　おじやねることを覚悟していまます。問題は自分の問題を抱えてゐるんだですよ。それが回生になると、つまらない話になります。それにしても問題は抱えなければならないからです。それに対してしては、問題は抱えなければならない。何故は、やり直した結果を問題がなければ問題に入らず、やり直さないとどうのばかしいと思ふからです。人間は極端なものに拘えられないわけはない。

司会　でもこの問題が現実化して問題が進んでしまうと思う。誰が問題者と意識するかと聞くと、筆者自身と一緒にやりました。

りーがんは「やべれ」と書いたりなどいふことです。現代の体制の中での支配者、被従者にならざる者を離れた學生としての自己を打ち出してくることですね。だから新規先も本当に劣等感や羞恥感を持つんですね。現代のバグロギーと打撃するような小説を自分自身の中に作りこみます。先生は高橋自身を离り越えることによってしか学生を苦にせしめないで済むのです。

学生曰　かば神をにぎり切っている者の一人として卒業したと思います。義理のバグロは神舟とベキアード、それにはせいぜい火炎爆弾ですが、それは他の国家の軍事力の中では「自殺爆弾」とか暴力的報復に対する人の頭の意念源だとおもいます。僕はおもやかな手を取向ける者として、それをそのままうながす。うやうやしくおもいかから新しい選択があるたらされると言わされたのですが、内ゲバ「内緒ダブルト」に関しては僕達は今のところそれを正解化することはできません。しかしそれをやるなんかない。それ意外にはどける道がないんだという形でもうやつらなのです。

反戦の誓い、不戦の誓い」なるものが行なわれますが、私はそれを「苦々しい想ひで見つめる者もえません。一九六七年の一月八日の朝まで多くの学生が集まつた、なんとかして東京に派遣しようともせず、マルクス主義を標榜する有力教徒は、「星力学生」とわが学園とは無関係だ」とうようなことを、平気で語っていたのです。

そうして、一月八日の朝には別に、一月八日には、例年どおり「不戦の誓い」なるものを「わだみ像」の前に執行したのです。このよがい、「わだみ像」は既にされた「反戦・平和」は、今日の権力による「ベトナム戦争」加担とアジア侵略、帝國主義のアジア支配に向けられた猛烈な闘いとは全く断絶したところにありました。いやだ日本にせざる現在の反戦闘争の具体的な展開——羽田闘争が、昨年の「一〇月」一四日から今年の四月二八日になり、「カバード大作戦」が実現した——この激しい闘いを抜きにして「反戦」を口にするわけにはいかないはずであります（想す）。だが、あり「わだみ像」は、これに敵対する人々によって愛撫され、しかも「反戦・平和」のシンボルとしてもはやそれでいてあります。しからずば、そうでない多くの人々は、この像を作り、この像を立て、誰もが「わだみ像」なるものを「わだみ像」の前に置いてあります（想す）。たが、あり「わだみ像」は、これに反戦の反戦と平和をうらむぞ、はばかり併せていたのです。私たちは、この「わだみ像」を破壊し、現在の状況に対する、いかげんな、そして、口先だけの人々に向けられたものとして受けとめなければならぬと思います。高所警安

の態度で日々を過ごし、しかもそれを、偽りの美辞麗句でおい間をうつするに、それ自身を告発するものとして受けとめなければならない、というふうに考へるわけあります。

ところが、例によじ、シャーナリズムはこの破壊を、全

共闘の暴力行為だと、口をきかめて非難しました。ブルジョ

ア・シャーナリズムの「魔である」ところの「赤魔」は、同じ

ことを、さばに増幅しつつ、ののしまつたのです。

現在の立命館大学校長、事務級武蔵教後は、「そつそく、再建を図りたい」という新聞発表を行なっております。彼ら

は、いじょうに学生たちが力を込めて引きずり出され、世間一

般に突きつけた「裏の反戦とは何か」という問ひを、簡單

に答えて、「わだみ像」の像口をふさ

ぎ、再びこれを立命館大学の境内に立てるにようやく「偽

りの反戦・平和」の中に、すべくを説くまでもうしてじうか

といふふうにみなければならないと思うわけであります。

かも、その先頭に立命館大学担当がたりでる。ついで、今

日の大学の姿があるといわなければならぬといふふうに思

うわけであります。

「わだみ像」が破壊された日、運動隊と学内運動隊たる

代々木音楽によつて全共闘を中心とする学生たちを、キャン

パスから追い出した大学当局は、まず、なんと云つたか。

明日からの授業を開始します」と、しかも、その翌日から、

授業なしはチーク手を持って、のこのことと講義に出かけ

て行つたのであります。学生たちは、「今日における真実と

は何であるか」という問題を聞いただし、すでに、パリケ

ドによつて、立命館大学の「平和と民主主義の理念」という

はだいとうふうにいわなければならぬと思ひます。シ

ンボルを失つた大学は、まさに赤魔々、その本質を鮮やか

に示したのであります。「わだみ像」が台座から引き下ろ

され、大地に引きずり下ろされ破壊された事実は、立命館大

学の現実、また、日本の大学の現状に對しては、最もふさわ

あるとこゝが暴露されたのであります。しかし、この大

学は少なくとも、一般的には「反戦・平和」のシンボルをも

り、民主的な大学だといふうに知られてきました。この

「わだみ像」が存在することは、他をあざむくことはな

いだらうといふうにいわなければならぬと思ひます。シ

ンボルを失つた大学は、まさに赤魔々、その本質を鮮やか

に示したのであります。「わだみ像」が台座から引き下ろ

され、大地に引きずり下ろされ破壊された事実は、立命館大

学の現実、また、日本の大学の現状に對しては、最もふさわ

しうべきことではないでしょうか。（義謹なしの声、拍手）

いまから四年前は60年代後半から70年にわたる全共闘運動は、後援があるのでレベルで完成したとい

うが、あるレベルがやがて来たとの話のようなのです。それまでの大学体制は、アメリカ

の強制力による大学改革の産物です。例を挙げれば、島嶼大学、前身となる鹿児島県師範と鹿児島文

理科大学、いまの筑波大学（旧東京教育大学）です。（）も校を中心にして軍国教育をやつしていた

のですが、立命は、最も優秀で、最も自由であります。

「わだみ像」が破壊された日、運動隊と学内運動隊たる

代々木音楽によつて全共闘を中心とする学生たちを、キャン

パスから追い出した大学当局は、まず、なんと云つたか。

明日からの授業を開始します」と、しかも、その翌日から、

授業なしはチーク手を持って、のこのことと講義に出かけ

て行つたのであります。学生たちは、「今日における真実と

は何であるか」という問題を聞いただし、すでに、パリケ

ドによつて、立命館大学の「平和と民主主義の理念」という

はだいとうふうにいわなければならぬと思ひます。シ

ンボルを失つた大学は、まさに赤魔々、その本質を鮮やか

に示したのであります。「わだみ像」が台座から引き下ろ

され、大地に引きずり下ろされ破壊された事実は、立命館大

学の現実、また、日本の大学の現状に對しては、最もふさわ

しうべきことではないでしょうか。（義謹なしの声、拍手）

反大学の構想

中大

資本制的分業の否定

「解体」に階級的表現を

大学といつ市民社会の

階級的分業を否認する

「解体」に階級的表現を

大正初期の講義録を見ると、講義は、講義の題名と題名

別にして、その題名は、題名と題名と題名と題名と題名

と題名と題名と題名と題名と題名と題名と題名と題名

。

再度、ここに我々が気付いたる限りでの「封鎖反対」の論議を通じて、我々は、封鎖などという物理力を行使せず当局との、話し合いによる解決を図る。諸君ちよつと待つてくれ。話し合い、というのは相互の平等な権利を前提条件として初めて成立しうるものだが、我々と当局との相互間関係は、一方への権力の独占的集中と他方の無権利状態がいつさいの幻想とベルトを剥いだ赤裸々な事実である。たゞえ当局が論破されても、唯「争う」と答えただけ莘莘な教員の矛盾を温存し、学生の要求を無視しうるのだ。そして学生には以前と一向に変わらない抑圧と苦渋に満ちた現実が残るのである。実際当局はその独占権を使はした。その時我々はそれに甘んじるべきだったのか。否、我々は實力で決起した。物の解らぬ專制君主打倒を。目指して。更に又、話し合いにて解決しつる要求等は、大學秩序内改良にすぎない。だが我々の要求の本質は、(一)管規粉粹、学生に自主管理運営権を!—と闘いの目標、文部省の粉粹、專制君主!—教授会解散、教授特權的身份制度撤廃は、現行大学秩序の矛盾の根源に纏く切り込み込む闘いなのだ。

そしてその他の斗争とも手を組んで、この京大も、東大も、日本を頂点としてその間の斗争や学友がその存在を懸けて問い合わせ、告発している。医局制度を軸とする医学部教授会等制度、そしてそれを拒否する学生に対する研究教育全般に渡る差別と恐喝、国家権力と相手携手この暴力的弾圧、工学部での助教授講座の教授による一方的取り壊し講座、研究室の教授による私有財産化、かくの如き教授会への予算権、人事権の一方的集中など、それに基づく研究教育等、大学機能、機構全体への教授の独占的介入、これこそ現行大学「秩序」の実際の姿なのだ。そして「アカデミック」の学生の生活とは、一切の年齢的形成を無視され、細分化と知識を詰め込まれる専門化奴隸育成の日々であり、労働者をブルジョアによる労働者支配の足としての高級中級指揮官の生産なのだ。そうなのだ、我々は、まさに、この様な大学の根柢的な指南と、破壊的解体を宣言する為了に斗いを決起したのだ。

ハ、多くの学生に訴え、「封鎖に入るにしても公式機関の承認を得てからにするべきである。」多くの学友に訴える。異議なしである。我々もその為にこの原斗争を数年間斗い抜くながで、幾度教養セミナーをまき、代議員大会、自治委員会を要求してきたであろう。だがそういう諸君は一切これに反応を示さはしなかつたのだ。そしてその中で我々が学んだのは次の事である。「斗いは一人から始まる事」と。そしてその斗い斗いを、道義的正當性を確信し得るとき、全ての戰術を行使して斗い抜け、それのみがその斗いへの学友の合流

史料 11

C
斗
季

卷之三

帝国主義段階の大学に要求される役割は大きくわけて二つある。その第一は、独占資本の要求に応じて大層の中級サラリーマン、中級技術者、中級官僚を養成することであり、（もちろん、高級官僚、高級技術者、高級技術者の養成も行われる。このために

いおこせ」)。その第二は、帝国主義のもとで社会全体の不調のふがまりと腐朽化は政治の反動化を必然とし、帝国主義支配階級はその強権的支配を維持せんとするために「体制地盤のイデオロギー」の生産の割合を大学に要求するということである。したがって、大学に在するものは、巨視的な観点からみるならば、「学問」ではなく、高級労働力商品を「生産」する道具と、体制を要り立てるオヨギ一よりだ。

東大斗争もその初期においては、「大学の自治」「学問の自由」云々といふことから始まつたのである。しかしながら、八・一〇告示に觸れられる東大当局の敗北しきりた姿が明確になるに至つて、

全学園に興味を持った学生は、金子義徳をはじめとして、九大に在籍する生徒たちも、その多くが、この問題に対する関心を抱いていた。そこで、金子義徳は、この問題を解決するためには、何を学び、何を研究するのか、ということを追求したのである。そして、その過程において(1)從來の学園対争にはほとんど登場しなかつた院生・助手が多数決起ししたこと、(2)注目しなければならない、また、(3)東大教授を名のり、「進歩的」教授を詐ついていた「教授」達の本質が暴露され、一切の既成権威が崩壊していくこと、(4)東大・東工大の実力対争がはじめて開催されたこと、(5)東大・東工大の実力対争が、東大の勝利によって終結したことは、すべて重要な出来事である。

以上、簡単に述べてきたように我々は、東大、日大斗争を主軸的に受けとめ、察斗争を契機に京大斗争をはじめ、いまなお斗つている。すでに述べたように、我々がこの斗争の中で問題としているのは、(1)崩敗しきった帝国主義大学の存在そのもの、(2)その崩敗しきった帝国主義をさらに上り直り帝国主義的に再編しようとする政府(リバシティ・アンド・ザ・モーリー)の動きである。そのような帝国主義大学を内から支えている大學当局者、督學連の存在、その思考方法をめぐる我々の斗争に敵対し、帝国主義大学を「左」から支える日共・民青の存在である。そして、我々はこれらのものすべてを根柢的に否定していくのである。

参考 4

卷三

我々は、このようなことをしていくにあたって、「パリコード封鎖」という戦術を、自らのものとして展開してきた。パリコード封鎖は、①大学機能をマヒさせるための物理的手段であり、②一切の斗争破壊者すなわち権力・田口民吉などを放逐し、③斗争の秩序を守りぬくという目的を共にする。さらに、④それは斗争の象徴でもある。大学の機能をマヒさせるのは、現在の帝國主義大学を否定する者にとって当然であり、帝國主義秩序体系を部分的に切りきずし、資本制分業社会の一分業機構をマヒさせることによって、そのような学内支配者（秩序派）にも打撃を与えていくのである。

（略）

この様にして我々は帝國主義大学の機能をストップさせ資本制分業社会の一分業体系のマヒを貢献しているのである。これ程大きな成果はないであろう。この第一の成績は整理すると全企圖派を主流に高めあげ、大学機能をマヒさせているということである。第二の成績は帝大をはじめとする帝國軍事斗争の爆発によつて、帝國主義者をして「大学問題」を治安問題化せしめ、帝國主義者の弱点を暴露せしめたことである。第三の成績はこうした斗争の中で既成権威を否定し、帝國主義と対決する強力なしかも大衆的な部隊を形成したことである。第四の成績は大学斗争が七〇年斗争の重要な核となり、七〇年斗争を異なる法解釈的な、国会内的なものから階級斗争そのものへと高めあげたことである。

もしもよりは、相手不安な学生が多いから問題が膨大したんだと思うんですけれどね。それが実際に現する考え方というものが、昔は研究と教育と両方だと教育的感覚でしただけですね。それが実験室の実験結果で、学生が非常に増えると、したがって、教育機能であるといふ事がかなり強くなつたのが、なかなかいいのかな、と、その実験室の問題が、そういう風に現れたんだ。それに対する學生の不満といつものがあるたった想定です。学生の側からみると、問題に反するなどといふのですね。自分を尊重する対象として考えて貰えてくれて、しないよ、まあまじの顔面が、無理をするやうな、なんじょな、よく思つて、そろそろ多少のその不満が、問題不安定のために生じたのであるようあります。だから、どうやうなうなこのたびをしてしまったんでされたね。

例えは、あの頃の主題のひとつはゲバルトで、「現代の理論」でも僕は始めから終わりまでゲバルト反対を書いていたけれども、ただゲバルトが始めた時には、その意味が充分分かつてはいなかつたという気がする。僕がその時考えたことは、ゲバルトは國家の暴力装置に対するための対抗暴力として出てきたと理解した。僕はたゞえ対抗暴力であつてもゲバルトには反対だつたけど、現象として学はそう理解していた。ところが大学の教師である自分の目前で学生たちがゲバルトを振りまわしているうちに、「そういう面倒な方がいるけれども、それは言つてみればタチマエで判つてきた。そうではなくくて、連中はゲバルトを持ちたいがら持つてゐるんだ」ゲバルトを振り廻すこと百体によろこびを感じているんだという気がした。ところが戦後日本近代、戦後民主主義が前提にしていった人間観のなかには、それが含まれていなかつた。人間は本来理性的な動物であつて、暴力衝動などはその人間観の外に追いやられていた。全共闘の連中と全く非生産的ないさかいを毎日やつてゐるうちに、そういうことが判つてきた。



しかし、これは日本だけではなく、世界的な動きでもある。フランスの王室革命は六八年で、アメリカでは南北戦争、イギリスでは第一次世界大戦など、世界規模の動亂がおこる。そういう時代的なものが全部連動していた。日本独自のもので言えば、日露戦争に問題としての日韓問題があつたし、経済的には高度成長期だけれども、公害問題など、六〇年代はじめのバラ色がだんだん破綻してきた時期だった。また、「民族主義」への反対も呼ばれていて、共同体的意識は崩壊してゆく。村落社会的、あるいはとの家庭は崩壊して家庭から離脱する」と学生が考へていた頃でもある。これをすべて「時代がそうだ」と言ってしまえば身もつかないけれども、東大の医学部の問題、中央大学の学生会問題の事件、明治大学の学費逼上げ問題などきつかけになつたのです。これが、それがだけが原因じゃない。時代のノリ、時代の流れとしか言いようのないものがおそらくあつたと思う。東大も「東大が安田講堂に入っているんだから、ウチでも何かしなきゃ」という感じだった。東大は六八年から安田講堂に經營をもつていたから、京大の血の氣の多いのは、東大に出現し、逆に東大の法学部の學生は、授業がないので東大に聴きに来る。聴きに来る学生と同じくらいうのが、バーチャルで安田講堂を行っていたなんじゃないか。

うでものを読んでみますと、大学はそれ 자체が体調の強化であるという考え方をしてしまいますね。したがって、「かれたのなかには明暦に大学の空間を重視し」また大学の管理組織そのもの、そのなかには教授も含まれていますが、それを離さなければならぬといふ思想があつたのだと思ふのです。そういう考え方方がどうしてできたかといふのは、からら内面の理論ですから私にはわかりませんが、少なくとも僕としてはそういう歪曲の流れがあつて、そこで、教師は單に外に向かうだけではなくて、大学の体制自体へ向かうということになると、なのではないでしょうか。それはおさやるより前に、あの時代の大学教育の原因として大きく述べます。しかしながら、そういう方針で教育がすすめられた故に、あるときの大学教育といふのは、非常に像しかつたけれども、結構、最終的には成りしないで終わってしまうという運命になりましたね。

ですから広島大学の学生運動の場合にも、一般学生にアピールするような口説が吸収して、いろいろな影響を及ぼすようになりますとか、音楽研究などをうしろとか、なしだと新幹線の車両の運転もあらずしもなんとか、音楽研究などをうしろとか、なしだと新幹線の車両の運転もあらずしもなんとか、音楽研究などをうしろとか、それがをも掲げ、一般の学生をひきつめたりして、運動して、かれるのを教訓をもつてしてしまいます。それは結局、大衆化のための、政治宣傳のための道場であつて、日本は大学当局を保護する、それを通じて日本の社会的構造を保護すると、いふことになりますが、かなり危険がちな状態になつてから危険を恐めていたが、私は思ふますね。ソシテー・ラジカルの学生は、「なんとかして大学を守るために」として活動などいろいろで学園を攻めたりしましたが、中核部の「大学の管理体制を打ち破る」ということを競争の目標であつて壁へは引けないと、なんといふですか、抽象的、概念的な言葉のほうが優位になつて、それはよろよろ不成功に終わるだま

（一） 一九五〇年、ある朝鮮各団体が共通して此事じまうけれども、それまでよりよって、学生が大学論議を正直の放逐目標として、かつ暴力的手段をとったというところが、あの時点での大きな質的變化であり、その原因がよくわからなくなっているのであると思うのですが、

坂島 ニューヨークの考え方自体、根本的に一貫のアーチビズムみたいなものがあつたのではありますまいか。すべての問題とか体制を否定するんだとしても問題ですね。それに加えて、理解は、ニューヨークのあり方に異議を唱へて、アーチビズムへの問題をあくまで。そして、西側になればヒッピーの道場などといふことを唱へて、大学をとりこんで、必ずしも和やかでもうまい形で問題提起といふものが、だいたいおいて、大学をとりこんで、必ずしも和やかでもうまい形で問題提起をして、外に向かって、これが活動力に対してものを語る、問題にする、となるんであります。だからこそ、

うのがわく解説されるような筆調からして、この間にだんだん広がって来るなら、やっぱり固らな
く飛行機があることはありますナ。

上場 「これはね、私の感じでしょ。」 一級学生にも二つのタイプがありましたね。やはり貧富に序的なグループ、「おは、かなりあるんですね。」 一般学生でも「してそう誰も立していととは思わないしむし、全く問題の発見にハンパないぞ!」 一般学生もかなりで、やっぱり両方ありますね。これは豊かなものだと思いまして。

「僕はね、いまになって思えば、かなり苦労はしました。あの紛争の過程においては、しかし、まだ、自分自身に盲点があったのだ、実業主導の立場があつて、どうかわからなかったのです。それが今、日本社会全般がもう実業主導になりまして、かねてはじょうずにならぬ問題にしてなかつたのです。かねてはじょうずにならぬ問題をもう一つ、実業主導の立場におそれていたもののが出来てしまつたのです。それで、かねてはじょうずにならぬ問題をもう一つ、実業主導の立場になりましたね。しまの新人類から見れば喜んでしまうけれどね、なんとか風な想定をもつたと想うんです。それはもう失われつありますな。そういう意味では、なんかやりとり楽しいなど、いう感じがちょっとあるんです。ものと嬉しい出して」

「さあ、私ども大いに苦労もしました。ただし、私自身、やっぱり東京大学というのはよがやかななふと感るのは、いろいろなことがありますだけれど、僕は純然たるなのかもしませんけれど、つまり身体の危険をいうものは絶対にませんでしたね。それだけに前線の学生に甘くなつてしまふところにござるのかもしれませんけれどね。やっぱり、然のね、一種の理想主義者としものに対して、一種のシンドバードといふものはないでいます。たいへん苦労はしましたけれど、そういう古風な理想主義者

資料一覧

- 参考 1 最首悟「私にとってのパラダイム・チェンジ」（荒岱介ら著『全共闘三〇年時代に反逆した者たちの証言』実践社、1998年、222頁）
参考 2 牧野剛『30年後の「大学解体』』ウェイツ、2002年、8頁
参考 3 石川忠雄「慶應義塾大学の紛争」（大崎仁『「大学紛争」を語る』有信堂、1991年、29頁）
参考 4 加藤一郎「東京大学の紛争」（参考3と同じ、134頁）
参考 5 奥田東・岡本道雄・上柳克郎「京都大学の紛争」（参考3と同じ、218頁）
参考 6 飯島宗一「広島大学の紛争」（参考3と同じ、257頁）
参考 7 柴田翔の発言（亀加田武・柴田翔・島田雅彦「たしかにあそこで何かが変わった」筑紫哲也編『全共闘－それは何だったのか』現代の理論社、1984年、148頁）
参考 8 森毅『ボクの京大物語』福武書店、1992年、75頁
史料 1 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』資料編2、2000年、668頁
史料 2 山本義隆「生きのびた知性」（山本義隆『知性の叛乱』前衛社、1969年、64頁）
史料 3 山本義隆「知性の叛乱」（史料2と同じ、135頁）
史料 4 山本義隆「いま。こう考える」（史料2と同じ、209頁）
史料 5 山本義隆「攻撃的知性の復讐」（史料2と同じ、244頁）
史料 6 「「大学問題をめぐって」ティーチイン」（京大新聞社編『京大闘争　京大神話の崩壊』三一書房、1969年、342頁）
史料 7 高橋和巳『わが解体』河出書房新社、1997年（初出は1971年）、74頁
史料 8 師岡佑行「偽りの「反戦・平和」の告発　「わだつみ」像の破壊の意味するもの」（情報出版編集部『全共闘を読む』情報出版、1997年）
史料 9『STRUGGLE』第3号、1969年3月
史料 10 京大におけるビラ（1969年1月20日ごろ、大学文書館蔵）
史料 11 新入生大会 公開質問状回答集（1969年6月11日、大学文書館蔵）
史料 12『サザエさん』第37巻、第38巻、朝日新聞社、1995年
写真 1 学生部前で封鎖解除を呼びかける奥田総長（京都大学百年史写真集』1997年、110頁）
写真 2 東一条付近の市電軌道上に築かれたバリケード（写真1と同じ、112頁）
写真 3 時計台の封鎖解除の光景（写真1と同じ、113頁）